

奄美の自然を描く

田中一村 いっそん

「運転手さん、あのおじいさんは誰ですか。」

奄美大島の本茶峠 ふんちやとつげ を走るバスの中で、登校中の高校生が尋ねました。同じ時間に同じ場所を、時には立ち止まり、時にはきよきよと周りを見回しながら毎日歩いているおじいさんが、気になっていたので。

「千葉から来た、ちょっと変わった絵描きらしいよ。」

バスの運転手は、あまり興味 きょうみ がないような口調 くちやう で答えました。それを聞きながら高校生が目で追ったおじいさんの姿は、まるで何かを探し求めているようでした。

そのおじいさんの正体こそ、孤高 ここう の日本画家、田中一村 いっそん (本名・田中孝 たかし) でした。この時、一村は、名瀬



【考えてみよう】

一村の生き方と、自分の生き方を、比べながら読み進めよう。

【孤高】

一人だけ、他からかけはなれて気高い様子。

【関連年表】

一九〇八年 誕生

一九二六年

東京美術学校に入学するが、五月に退学。

一九三八年

千葉に移り住む。

一九五五年

四国・九州などを巡る旅に出る。

一九五八年

奄美大島に移り住む。

一九六五年

姉の喜美子が死去。

一九七七年 死去

二〇〇一年

田中一村記念美術館開館。

市（現在の奄美市名瀬）の有屋ありやというところに住み、大熊だいくまにある大島じゅむぎ紬の工場で、染色工として働いていたので

す。
一村は、一九〇八年（明治四十一年）に栃木県とちぎで生まれ、五歳の時に東京に移り住みました。幼い頃から絵の才能があり、七歳の時には児童画展で最高の賞を受賞するなど、神童の名をほしいままにしていました。

しかし、その後成長して、十八歳で入学した東京美術学校（現在の東京芸術大学）は、わずか二か月で退学してしまいます。理由は明らかになっていません。

退学後も自分の作品に誇りを持ち、東京で独学の道を歩んでいた一村でしたが、二十三歳の時に発表した自信作「水辺にめだかと枯蓮かれはすと露ふきの臺とう」は、それまでの後援者から全く賛同を得られませんでした。その一方で、東

【奄美大島略地図】



京美術学校を卒業した 同級生が画壇がだんで活躍し始めたことが、一村をより不安にさせました。

一村は、環境を変えるために親戚しんせきの川村氏を頼りたよ、東京から千葉に移り住みます。そこで一村は、膨大ぼうだいな時間を、花鳥や風景のスケッチに費やしました。その努力が報われ、三十九歳で発表した「白い花」が、青龍せいりゅう社展で初入選します。

しかし、その後が続いて作品展に出品した自信作は、ことごとく落選し、再び行き詰まった状況を打開するため、四十七歳のときに一村は、四国や九州などを巡めぐるスケッチの旅に出かけました。この旅行が、後に一村を奄美に向かわせる転機となります。南方の自然に魅了みりようされて帰ってきた一村は、知り合いの画材店の人に、「南はねえ、海はきれい、花もきれい、鳥もきれい。また南へ行きたい。」と語っていたそうです。

【東山魁夷ひがしやまかいい】

昭和を代表する日本画の大家で、「残照」、「道」、「緑響く」などの大作がある。東京美術学校での、一村の同級生。



【現在の名瀬港付近】

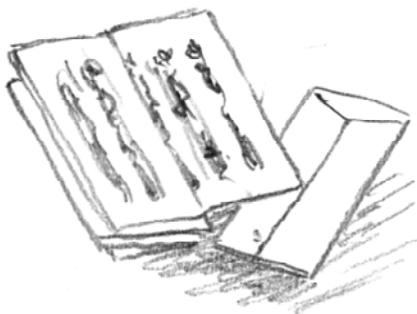
その後、五十歳で、院展に出品した作品が落選し、ついに一村は奄美行きを決意します。千葉の住み慣れた家を引き払い、一村の画業を支え続けた姉と妹にも別れを告げ、一村は一人で奄美へと旅立ちました。

一村は、一九五八年（昭和三十三年）十二月十三日の早朝、名瀬港に下り立ちます。名瀬市の柳町に部屋を借りて、与論島や沖永良部島などの南の島々を巡り、絵の取材を行いました。五感を通して、奄美の自然や風土、人々の暮らしに触れ、見聞を広めていったのです。

中央画壇に背を向けて、奄美で自分の思うままの絵をのんびり描くことにしたようにも見えた一村ですが、その心の内には、将来東京で個展を開き、作品で勝負するという秘めた思いもあったようです。千葉の知人宛ての手紙に、「私のえかきとしての生涯の最後を飾るえを

【院展】
日本美術院による日本画の展覧会。

【一村と奄美和光園】
奄美和光園は、奄美市にある国立のハンセン病療養所である。一村は、この医師と親しくなり、園の多くの人々との交流を楽しんだ。また、入所者に頼まれて描く肖像画も喜ばれた。





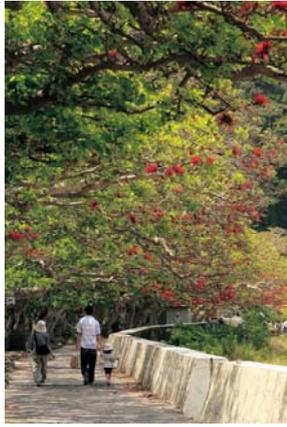
かく為^{ため}に来ていることがはっきりしました。当地での作品は保存して置き、もし運があつたら東京で勝負をつける材料にします。」とあります。

一村は、五十三歳で有屋^{ありや}の借家に移住し、翌年、大熊^{だいくま}にあつた紬^{つむぎ}の工場で染色工として働き始めます。その頃の一村が、こんな手紙を書いています。「私は紬工場に染色工として働いています。有数の熟練工^{じゅくれん}として日給四百五十円也^{なり}、まことに零細^{れいさい}ですが、それでも昭和四十二年の夏まで働けば、三年間の生活費と絵具代が捻出^{ねんしゅつ}出来ると思はれます。」五年間我慢^{がまん}して働き賃金を得ることで、その後三年間は絵の制作に専念できるといふ、一村の壮絶^{そうぜつ}な思いがつづられています。ひたすら集中して絵を描くために、彼は働いたのです。

一村には、自分がやるべきことがはっきりと見えてい



【奄美大島のデイゴ並木】



ました。南国独特の植物などを大量にスケッチし、それらを紙本や絹本に描くことで、奄美の自然を全力で表現しました。

絵を描いている時の一村は、気分を高揚させ、血管を浮き上がらせ、描いているものを凝視し、筆先に全神経を集中させていたといいます。一村自身も、「画布に向かって絵筆を握っているときは、尋常ではない緊張感と集中力が必要です。一瞬たりとも気を抜くことは許されません。」と語っています。

そのような一村のことを、不思議な目で見る近所の人たちもいました。ステテコ一枚で自然を眺めながら歩きまわり、何日も人との交わりを断ち制作に打ち込む彼の姿は、変わり者と思われても仕方がなかったかもしれません。もともと、一村自身は、そういう周りからの評価は意に介さず、絵を描くことのみに専念しました。

【紙本や絹本】
日本画は、紙の他に、絹などにも絵を描く。

【ステテコ】
ズボンの内側にはく下着。



晩年になって、一村が渾身の力を込めて制作した、二枚の大作が完成します。「不喰芋と蘇鐵」と「アダンの海辺」です。「不喰芋と蘇鐵」は、不喰芋や蘇鐵の葉が大きく描かれ、遠くには水平線が見える、奄美の奥深さを感じられる雄大な作品です。「アダンの海辺」は、正面に黄色く熟れた大きなアダンの実があり、その周りの鋭い葉が存在感を示し、なぎさの向こうに夕暮れの風

【鑑賞してみよう】

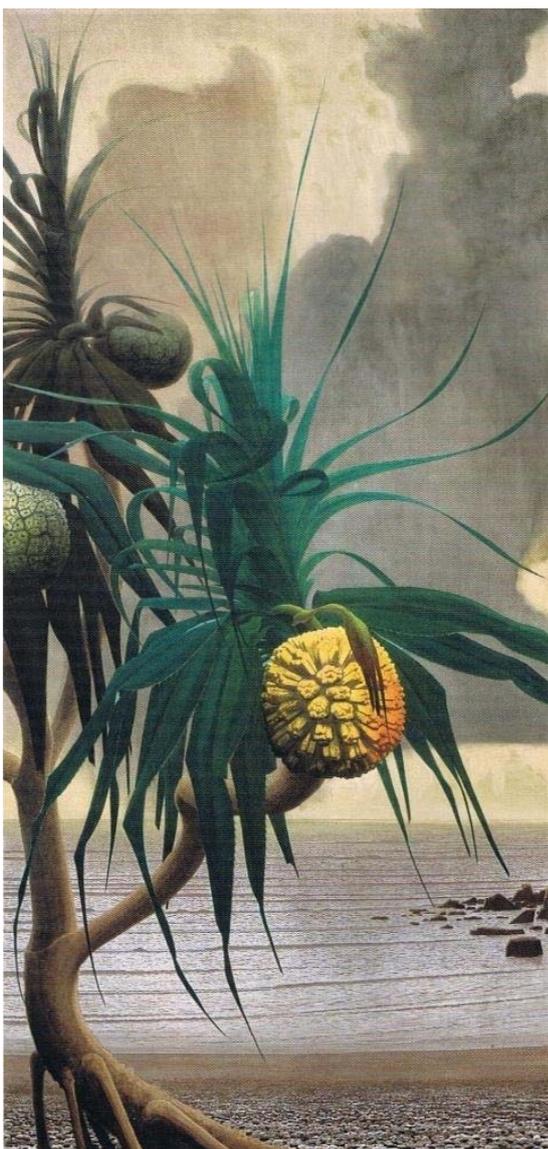
実際に、田中一村の作品を鑑賞してみよう。

景が広がる、奄美の美しさを表現した作品です。この二枚は、一村が「エンマ大王への土産みやげ」と呼んで、誰にも売りたいくないと願った作品とも言われています。

孤独の中で、ただ絵を描くことに全身全霊ぜんれいを注ぐ一村の奄美での生活は、十九年に及びました。その間、予想外の資金不足や健康面での不調、よき理解者であった姉との死別などもあり、制作が思うように進まないときもありました。

【調べてみよう】

田中一村の姉は、一村にとってもどのような存在だったのだろうか。



【アダンの海辺】（田中一村画 個人蔵 ©2011 Hiroshi Ni yama）

【一村終焉の家】



晩年には、何度か転倒、気絶、入院をするなど、体調も悪化していきました。氣力を振り絞って絵を描く生活も、体力の衰えとともに、だんだんとうまういかなくなっていったのです。

一九七七年（昭和五十二年）九月十一日、一村は夕食の準備中に心不全で倒れ、六十九歳でこの世を去りました。亡くなったときの様子は、四畳半の部屋にうつ伏せに倒れ、左手は胸に当てられていました。かすかに下唇をかんだ表情のあとが残っていましたが、苦しい様子もなく、端整な顔には安らかさが漂っていました。奄美の豊かな自然に包まれたような、穏やかな最期でした。

一村の死から七年後、NHKの「日曜美術館」で、「黒潮の画譜 〈異端の画家 田中一村〉」が全国放送され

【終焉の家の石碑】



【田中一村記念美術館】



(奄美市)

ます。この番組が大反響^{はんきょう}を呼び、その後、一村の展覧会が全国各地で開催され、奄美の展覧会には大勢の観客が訪れました。ほぼ全国的には無名だった一村の生き方が、彼の死後になって脚光を浴びたのです。

二〇〇一年（平成十三年）には田中一村記念美術館が奄美に開館し、二〇一〇年（平成二十二年）には、一村の研究者たちによる最新の研究成果に基づく「田中一村新たな全貌^{ぜんぼう}」展が、千葉市、鹿児島市、奄美市で開催されました。鹿児島市で行われた展覧会には、三万人を超える入場者数が記録されています。

こうして一村は、多くの人々に愛される伝説の画家となりました。奄美の自然を存分に描いた数多くの一村の作品は、今、私たちの心を満たす大切な宝物となっています。

【考えてみよう】

あなたは、一村の生き方から、どのようなことを学ぼうだろうか。

